

地域連携を取り入れた松本大学の ユニークな教育の展開

住吉 廣行

(松本大学副学長)

一 はじめに く松本大学設立の経緯とミッションく

松本大学は、長野県、松本市と学校法人松商学園が三分の一ずつを出資し、松本広域連合からの補助も得て、平成一四年四月に開学しました。その経緯から、本学教職員には「地域立大学」との認識があり、地域社会活性化への貢献を強く意識しています。そのため、本学はそのミッションとして「“幸せづくりの人” “づくり” “地域の必需品” 大学を自称し、人材育成・地域貢献への意思を表現しています。⁽¹⁾⁽²⁾

二 帰納的教育手法としての地域連携 く教育論の展開く

本学ではミッション実現のため、一種の強制力を内在させています。それは学生の状況を注意深く観察し、理論化して導出された、帰納的教育手法⁽²⁾⁽³⁾です。物事の本質を理解するのに、理論から始めそれを敷衍して全体を推し量るという、従来の講義形式での演繹的な教育手法があります。しかし最近の若者は、現実社会の課題や具体的な姿に触れ、それを何とかしようと創造的に考える機会が極端に減っています。このことは「正解のある試験問題」への対応の巧拙や知識の量で計られる偏差値とはあまり関連がないよう

に思います。例えば都会の子供に「カブトムシはどこで採れるのか」と尋ねると「○○百貨店」と返ってくるという笑えない話があります。自然界に棲む生物とのつながりが希薄になってきています。有り余る文明の利器に囲まれ過ぎた現代社会の欠点かもしれません。いずれにせよ、現実の感覚を前提とした演繹的学びが通用しなくなっているようです。こんな時、帰納的教育手法は学生の興味を引き、学ぶ動機を掻き立ててくれます。何故学ぶのか、何のために学ぶのかが納得されていなくては、学生の情熱を引き出しにくく、本当の教育を成立させるのは難しいと感じます。

さて、帰納的教育手法を採用するには、多様な現場が必要で、それが地域社会です。本学では大学の敷地内にとどまらず、地域社会全体を学びの場と見做しています。それゆえ学外での実習・観察等はアウトキャンパス・スタディと呼ぶのです。これに対しインキャンパスでのそれは、基礎的で理論的に裏づける学びになります。学内外を意識的に結びつけ、在学中から将来の働く現場を認識させながら、意欲的・創造的な学びを展開するのです。この意味では、キャリア教育の普段からの実践とも言えます。また、地域挙げての昔の子育てシステムを、現在に復権させているという見方もできそうです。

三 松本大学で展開されている地域連携の構図

本学の地域連携は、授業展開と強い関わりを持っていることがその大きな特徴となっています。

(a) 学科構成と地域交流の分野

本学では、どのような分野に地域の社会的ニーズがあるかを分析したうえで、学部(学科)が構成されています。現在は、総合経営学部(総合経営・観光ホスピタリティ)、人間健康学部(健康栄養・スポーツ健康)、松商短期大学部(商・経営情報)から成っており、総定員は編入学も含め千七百五〇名です。観光ホスピタリティ学科では、自然景観・環境問題・農業経営等の他に、ユニバーサル・デザイン(UD)という考え方を介して、社会福祉やまちづくりなどにも守備範囲を広げています。こうした学科構成から、教育分野や教員の専門性が反映された、特色ある地域連携が展開されることとなります。

(b) 大学側の地域交流の多様な窓口

本学の地域対応としては、①各教員が担当する授業を通

した関わり、②文部科学省に採択されたG Pでの取組や、科学研究費、地域共同研究支援等を利用しての、個人研究を通じた連携があります。③また本学はエクステンション機構を持ち、その中の地域総合研究センターが窓口になって、大学を挙げての交流も行っています。④さらに学生が自主的に地域連携活動を遂行する窓口として、地域づくり考房“ゆめ”があります。地域住民が、学生との協働を求めて絶えず相談に出入りしており、見学を訪れた方から「珍しい!」と驚かれる光景が見られます。



天ぶら廃油で、日本一周エコカーの旅。考房“ゆめ”の学生たち。

四 少子・高齢化、地球環境、格差社会への対応

本学と地域との連携は大変多岐に渡っていますので、こ

こでは紙面の関係で幾つかの典型例を選んで紹介します。その全容は、六月末に発行されるアニユアル・レポート^⑤に網羅的にまとめられます。また、文献を少し多く引用しておきますので参考にしてください。

(a) 高齢者や青少年の健康づくり

①スポーツ健康学科では健康運動指導士や実践指導者の育成を一つの目標としています。長野県は全国一の長寿県ですが、それは健康福祉政策等で支えられています。実際に運動指導受講の高齢者の医療費は、平均値に比べ二〇%も少ないのです。^⑥もしこの松本方式の運動指導法が全国展開されれば、六兆円にも及ぶ節約効果をもたらします。本学はその先頭に立ち、近隣の市町村や企業から、指導を求めざるを得ない状況です。松本大学生の現場実習は、



学生が筑北村の方に個別運動指導。

高齢者の目線で対応し、学問的な知識や技術の獲得水準も高く、参加者から高い信頼を得ています。諏訪市は、市長自ら体験し、諏訪湖や温泉施設も絡めながら、「健康づくり」を「地域づくり」に結びつけようと、連携を模索中です。筑北村や南箕輪村でも、栄養指導も含めた支援を求め、国営アルプスあづみの公園も利用したインターバル速歩等の運動指導が展開されています。公園への誘客効果を含め、学生が関与することで地域社会全体が元気になる活動へとその幅が広がって、充実してきています。

②女子ソフトボール部やサッカー部では青少年への技術指導の支援を行っています。これにスポーツ栄養の観点から食事指導もつけ加え、メタボリック予備軍を減らすなど、子供の親や高校のクラブ活動関係者からも大変喜ばれています。

(b) 地産地消・都農連携の産直運動と伝統料理の継承

長野は農業県であり、緑の田園が北アルプスなどの山並みと相俟って、観光資源でもある美しい自然景観を形成しています。従って農業振興は観光振興と強く結びつくこととなります。ところが農業は貿易自由化の大波の前に苦戦しており、後継者不足も深刻な問題になっています。

し、互いに知り合いネットワークを構築するなどの組織化に協力しています。

④安曇野市と武蔵野市の間で、都農交流が継続されています。旬の農産物や加工食品を運び込んで、都市住民の「安曇野観光」に関する意識調査を行い、活性化策を探求しています。また、松商と湘北短大との相互点検・評価活動で、互いを補完するために、海と山の観光での交換授業も行っています。この取組でも農家や美術館或いはテーマパークや水族館等との連携が進みました。

(c) まちづくり ～優しさの交流とUDの視点～

松本市も中心市街地が空洞化し、郊外にマーケットが移行した結果、自動車に乗れない高齢者や子供たちにとって、住み難い街になってきています。こうした中で、特定の誰かが対象ではなく、誰にも配慮が行き届いた(UD化された)まちづくりや、人の優しさの交流が盛んなまちづくりを進めようと、住民と連携しています。

①松本市は城下町であり、それほど大きくはないため、街の中では徒歩や自転車での移動でも十分に用は足せます。自転車を使ったベロタクシーは、地球環境問題からも松本市に相応しいシステムと考え、学生も協力して無料のレン

こうした事態を前にして、①農家やコンビニ店と共に地元産の食材(くれき野米や松本一本ねぎなど)を活用しての、高齢者・女性向けの商品開発を行っています。またむかごなどの農産物を利用したお土産品の開発にも協力し、マーケティングを実践的に学んでいます。

②県内各地に伝わる伝統料理のレシピづくりにも関わり、冊子にまとめています。また、安曇野の及木地区では地元老人会と連携し、料理法を含む伝統文化を写真や図にして、後世に残す活動を繰り広げています。



安曇野の観光を考えるシンポジウム。
松本大学キャンパスにて。

③長野県では小規模農家が集まり、直販所の他に、都会と農村を結んだ自主的な産直運動が盛んに行われています。安全・安心で生産者の顔が見える農作物の供給網の確立が、同時に農業を守る活動につながります。このような中、本学は農業者間の経験交流会を催

タサイクルと共に、その普及に努めています。

②松本駅改築に伴い、西口が再開発されることになりました。これを契機に、高齢化が進む中で人に優しい街を、またアルプス口としての表玄関にもなることから、建築物の高さ制限など景観にも配慮された街をつくらうと、学生と地元町内会とが連携して活動しています。

③大学近くの窪田空穂記念館では、地元企業の支援も受け、芝沢小学校、松本大学、日本棋院と連携して、伝統文化としての囲碁の普及活動を行っています。松商短大では全国に先駆け囲碁が正規科目になっており、本学を会場に高校選手権大会・小中学生の選抜大会、地元新聞社やテレビ局の大会等が頻繁に行われ、若い世代と高齢者との和気藹々の交流に一役買っています。

(d) 環境を意識した新しい観光のあり方をめぐって

癒しやゆとりを求めた観光が見直されつつあり、スローライフ、ロハスといった方向性が広まってきています。松本・安曇野地域はその絶好の舞台を提供しています。

①文部科学省の「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」に採択され、松本市や松本商工会議所と連携し、観光ホスピタリティカレッジを開催しています。多様

な分野の達人を招き、観光地として何を備えるべきかなど、行政、観光業関係者等、多数が夜間に学んでいます。
 ②海外からの観光客を誘致するには、外国語での道標の完備や、パンフレットが用意されている必要があります。
 本学留学生が木曾福島町の要請に応じて韓国語での紹介ホームページを立ち上げて喜ばれたり、松本城では英語等での通訳を教員や学生がボランティア団体に入って実施したりしています。また台湾からの障害を持った方々と一緒に安曇野観光を行い、どの点に不便を感じるかなどの調査活動に携わっています。こうした活動は長い目で見れば、松本や安曇野へのインバウンドの誘客効果をもたらすだろうと思われ



学生がUD観光ツアーを企画。

五 おわりに
 ～地域経済の建て直しへ向けて～
 ここでは、松本大学の地域連携を「大学での学び」の視点から、いくつかをピックアップして紹介しました。最近これを地域社会の側から考える機会がありました。
 平成一九年の暮れ、内閣府が主催する「地方発、経済建て直し政策コンペ」が、主に地方のシンク・タンクに向けて呼びかけられました。本学は「人づくり」なくして「地域経済の活性化」なし」という姿勢で応募しました。有為の人材を地域で確保するためには、①産・官・学の連携で、地域の魅力を創り出し、②自らの意思で故郷を活性化しようとする人材を意識的に育成する必要があること、③これに失敗すれば地方都市は、財政再建団体となってしまうことは必至である、と主張したのです。特に長野県は、大学等への進学に関しては、県内残留率が全国平均四〇％に対して一四％程度に止まっており、事態は深刻です。本学の申請は、幸い一〇倍の難関の一次書類審査を通過しましたが、二次のプレゼン審査ではベスト三に残りませんでした。
 最終結果は残念でしたが、「松本大学の学生を育てる取

組が、地域経済活性化に対しても効力を発揮している」と、経済の側の組織において全国レベルで認識され、評価されたということに、驚くとともに自信も持てました。

本学の学生が地域の中で生き生きと学び、コミュニケーションを図りながら活躍する姿それ自体が、地域社会を活性化していると思えます。本学学生の取組が、新聞や雑誌で頻繁に報道されると、それが他大学にもインパクトを与え、自分たちも何かやってみようとの考えを誘発しているようです。地域社会の「元気印のシンボル」として、大学自身の魅力向上と学生の「学びの場」「自主活動の場」の活性化を、これからも意識的・精力的に追求していきたいと思えます。

参考文献

- (1) 中野和朗「幸せづくりの人“づくり”」松本大学出版会 二〇〇四、一一一
- (2) 住吉広行「幸せづくり」「地域の必需品」大学への挑戦―地域社会と連携した教育手法の視点を添えて―」大 学と教育 No.四六、二〇〇七、九 四―一五頁
- (3) 住吉広行「文部科学省「特色ある教育支援プログラム」に採択された「多チャンネルを通して培う地域社会との連携―地域社会で存在感のある大学を目指して―」地 域総合研究第三号、二〇〇三、一〇 二九―六九頁

- 白戸洋「地域と連携した大学教育の可能性―地域との協働を事例として―」経済教育 No.二四 二〇〇五、九 五四―六〇頁
- 「孤立させない大学」AERA 二〇〇七、七、二五― 五五頁
- (4) 糸井重夫・青島金吾・丸山勝弘「地域の大学としてのキャリア教育の展開―松本大学松商短期大学部の就職支援活動とその方向性―」地域総合研究第六号、二〇〇六、 六一―七八頁
- (5) 住吉広行「教育・研究活動とアニュアル・レポート作成の意義」地域総合研究第四号、二〇〇四、六 五五―七 四頁
- (6) 根本賢一「インターバル速歩の秘密」ごま書房 二〇〇 五、六 根本賢一「人生はピンピンきらり」 オフィスエム 二 〇〇七、九 根本賢一・等々力賢治「地域がつくり、地域が育てる、生活必需品大学」週刊東洋経済 二二／一五増大 号 二 〇〇七、一二 九八―九九頁
- (7) 住吉広行編・著「信州の観光と松本大学」地域総合研究 センター 二〇〇四、一一
- 山根宏文・住吉広行編「地域と芸術」松本大学出版会 二〇〇五、一一
- 住吉広行「信州でのグリーンツーリズムと地域の活性化」 経済教育 No.二四 二〇〇五、九 六七―七二頁
- (8) 住吉広行編「安曇野の観光を考える集い」報告集 松本 大学出版会 二〇〇六、三

- (9) 白戸洋「コミュニティ・ビジネスによるコミュニティの再構築の可能性」 地域総合研究第五号 二〇〇五、六七—九二頁
- (10) 福島明美と愉快な仲間たち編「学生の視点からの信州の食文化」松本大学松商短期大学部 二〇〇六、三
- (11) 玉井袈裟男「老人たちのおきみやげ」松商学園短期大学総合研究所 二〇〇一、九
- (12) 峯岸芳夫「安曇野観光に対する市場アンケート調査と都農文化交流の試み」地域総合研究第六号、二〇〇六、六三五—三七一頁
- (13) 住吉広行「松本大学松商短大部—湘北短大の相互点検・評価の歩み」短期大学基準協会 News Letter Vol.三九 二〇〇七、八四—八六頁
- (14) 「観光と健康の連携で人材を育成する」ユニバーサルデザイン Vol.二二 二〇〇七、二二
- (15) 佐藤博康「地域社会人向けホスピタリティ人材育成及びスキルアップのための支援プログラム」地域総合研究第七号、二〇〇七、六一—七二頁
- (16) 佐藤進「留学生を育てる」松本大学出版会 二〇〇七、三